



第35回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会において、「HPV関連中咽頭癌における内因性免疫APOBEC3とエストロゲン-エストロゲン受容体の予後との関係」という演題で「奨励賞」を受賞された加納 亮先生に、研究テーマ設定の経緯や受賞演題の概要、今後へ向けた抱負についてお話を伺いました。

FOCUS

若手研究者 interview

金沢大学附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科

加納 亮 Makoto KANO

小さな穴から広がる大きな世界に魅せられて

私は父母、祖父、曾祖父、叔父が耳鼻咽喉科医という医師家系ならぬ耳鼻咽喉科家系に生まれました。幼少時代を局所麻酔薬の匂いとともに過ごし、自然と耳鼻咽喉科の道に進むことを決意していました。耳鼻咽喉科は老若男女幅広い層の患者さんに対して、外科と内科のいずれも手掛けることができる特別な診療科です。また、鼻や耳といった小さな穴から覗く先に大きな世界が広がっているところも本領域の魅力であると感じています。

金沢大学附属病院の初期臨床研修には「外科系専門プログラム」があり、専門領域を決めていた私はこのプログラムの耳鼻咽喉科・頭頸部外科コースを選択しました。その

ため内科や救急などの必修科目以外は耳鼻咽喉科で経験を積むことができ、早くから特有の手術手技や診察方法などを学ぶことができました。私はもともと臨床医として目の前の患者さん一人ひとりに向き合っていきたいという思いが強かったのですが、大学の先輩方は臨床に力を入れながら、病態の解明や新たな治療法の確立を目指して研究にも精力的に取り組まれています。そうした姿を間近に見たことで、自分も研究の世界に飛び込んでみようと大学院に進学しました。

臨床で腫瘍の患者さんを診る機会が多かったことから、がんについての研究を希望し、当教室の十八番であるEpstein-Barrウイルスと上咽頭癌で蓄積した技術をもとに、私は近年増加傾向にあること、陽性率が50%程度で陽性群と陰性群の比較のしやすさから「ヒト乳頭腫ウイル